

## 「公共図書館と学校の連携」

主催：富山県図書館協会・富山県立図書館

県立図書館の多目的ホールで行われた研究集会には、テーマが学校との連携だけに公共図書館司書の他、教諭や学校司書の参加が多く、学校図書館への関心の高まりと、主催者の広い範囲への広報のご尽力が感じられる会となりました。以下、私的な感想で報告させていただきます。

### 事例報告①大垣市立図書館 北村彰夫氏「大垣市における学校図書館と公共図書館の連携」

岐阜県の大垣市では平成7年度より「学校図書館情報化・活性化推進モデル事業」の指定を受け、推進委員会に市立図書館も加わり、学校図書館の電算管理化が進められ、その延長線上として学校図書館職員の全校配置が実現されたそうです。そののちの学校司書の技能研修と学校図書館への団体貸し出しサービスの実践が報告されました。学校図書館も公共図書館のサービスの対象と位置づけての連携です。

けれども大垣市の学校図書館職員は、1校専任ではありますが1日5時間勤務で、免許の問われないという位置づけの雇用です。私は以前から「学校図書館の職員問題は、公共図書館の職員問題」と感じていました。そして「図書館を作りあげるには、専門で正規で専任の職員集団が不可欠だ」と実感をもって言えるのは公共図書館職員以外にいないとも思い、なかなか主張していただけないことをはがゆく思っていました。ですから、この大垣の事例は、学校図書館職員の配置に公共図書館が最初からかかわるという好例でありながら、なぜ専門性をとわれない職員の配置になってしまったのかが、不思議でなりません。

また、そんな雇用条件で入っている方々に「公共図書館からの自立をすすめながらの連携」という主張を、図書館づくりの条件を知り尽くされている公共司書の方がなぜなさるのか理解することができません。課題とされた「学校図書館職員の身分保障、勤務体系の整備、専門の確立」に対し、どのように具体的な見通しをもっておられるのか、図書館の専門家ならではの今後の実践を期待したいと思いました。

### 事例報告②高岡市学校図書館司書 竹田延代氏「高岡の学校図書館と公共図書館」

### 事例報告③富山市立図書館 高峯美紀子氏「富山市における学校図書館との連携」

高岡市の学校司書の配置状況は以前から会報でお伝えしていますが、大垣市と同様に研修と1ヶ月無制限の団体貸し出しで、高岡市立図書館が司書会をバックアップしている事例が紹介されました。高岡の学校司書の方々も2校兼務という恵まれない条件の中で、スタッフマニュアルの作成や電算管理化をすすめ、専門性を高めながら条件の向上を目指すという地道な努力を重ねられています。それには、本当に頭のさがる思いでした。

一方、富山市立図書館からは、今までの公共の児童サービス活動のなかの学校との関わりが説明され、新たな学校司書との連携の現状が述べられました。図書館全体の3つの目標に「児童奉仕の拡充」が挙げられている富山市立の業績は感嘆するものがあり、この実績で学校司書を育て支援していただければ、どんなにか心強いかわかります。

けれども、高岡も同様ですが、現在公共にとって学校図書館は連携するに値する相手ではないというのが現状です。図書館法では「学校図書館と連携をしなければならない」と唱われていますが、連携できる相手に育てる義務は公共図書館にはないといえないのです。

それでは、その義務はどこにあるのでしょうか。長い間、担任と兼務だった教諭が支えてきた学校図書館に、決して十分とは言えない条件で配置された学校司書が全面的に担うべきものなのでしょうか。それはあまりにも酷な話だと思います。私は、学校図書館の育ちへの支援は、行政が学校司書の勤務体制の整備を行い、公共がその実績で支え、学校司書が専門性を磨くなどの相乗的な関わり方でしか実現しないことなのだと思います。そして、手助けしてあげるとか、してもらってるという後ろ向きな関わり方でなく、各機関が自分の問題として積極的に関わるという姿勢が大切なように思います。

けれどもこのように公共図書館が充実しているという現状を考えますと、この問題に大きく関われる力を持っているのは、やはり公共図書館です。私たち市民が、期待してしまうのは、無理なことかではないでしょうか。

#### 事例報告④黒部市立東布施小学校 寺井信子氏「豊かな心を育てる読書指導」

活動の方針を ・読書の楽しさの体験 ・各教科や総合的な学習の時間の活用 ・家庭、地域、市立図書館との連携におき、朝の全校読書、地域ボランティアによる読み聞かせの会、図書委員会による紙芝居の会、多読者の表彰を行う集会活動などの事例が発表されました。

「読書の幅が広がった」「自分の考えを見直す良い機会になった」「読書に対する興味や関心がさらにたかまった」という言葉にちりばめられたこの報告からは、子ども達ひとりひとりの表情が見えてきません。興味も関心もたかまっていない子どもは絶対にいないという先生の強い意志さえが感じられます。

私事ながら、子どもと本にかかわる文庫活動を11年してきていますが、文庫の子どもの数は事例の学校の児童数よりもっと少ない20名あまりです。そして学校より親密な関係を子ども達と持っているという自負もあります。それでも、子ども達の読書意欲を高めたと言い切ることはできませんし、そういう権利を私自身が持っているとは思いません。この報告は、なにか子どもと読書を捉える視点がずれているという感じがしました。

そして、司書教諭だけが配置されるようになれば、このような学校図書館が作られるのであろうと想像され、ずっと学校図書館の充実を願ってきた私たちが望んだ形は、このようなものではないと感じました。